

あ と が き

「灯下親しむの候」一言いふるされた言葉だが、未曾有の暑さを経てようやく冷気を覚える仲秋を迎えた今、装いも新たに「東南アジア研究」第2巻第1号をお届けする。本来これは通巻第5号として出るはずのものであったが、研究活動の発展に伴って、次々に届けられる原稿数から、年4回季刊として継続刊行する見通しがじゆうぶんに予測されるに至ったために、これまでの4冊（第1号から第4号まで）を第1巻とし、本号から第2巻として巻号制をとることとした。このため、本来巻末に付すべき総索引もとりあえず本号の終わりに挿入することにした。表紙の色も巻毎に変えることになり、第2巻の4号まではこの薄みどりの色が続く。第2巻第2号はマラヤ稲作シンポジウムの特集号として第3号と共に本年12月に出る予定であるが、来春3月に第2巻第4号が出た後は、各年度に4冊ずつ、文字通り季刊として定期的に刊行されることになる。当研究センターの発展のためにも喜ぶべきことである。

だが、現在は原稿数の過剰という嬉しい悲鳴から、多くの方々に御迷惑をおかけすることになっている。本号掲載の口羽益生、木村康一、刈米達夫の諸氏の原稿はすでに前号の締切時にいただいたものであり、また本号に載せる予定であった南勲氏の原稿は、締切日にわずか2～3日遅れて届けられたとはいえ、すでに予定原稿が満員の状態にあったためやむなく次号廻しということになった。いずれもここに深くお詫びを申し上げなければならない。本号は、南氏に次号に廻っていただいたにもかかわらず、予定ページ数に収め切れず、かなりふあついものとなった。厚さの不揃いは、並べた時に見た目にもあまりよくないが、提出された原稿は時期を失しないようにできるだけその時の号に収録して行く建前とした結果である。

本号の内容は、言語、社会、農業、医薬、さらには紀行文など多岐にわたり、「現地通信」「文献解題」の新企画をもとり入れたので、かなり盛り沢山の、バラエティに富んだものとなった。本誌の性格は、主として研究例会での報告を載せるのが建前である関係上、学術的というよりは啓蒙的であるが、すべてが報告になるのは決して好ましいことではないので、ある程度専門的、学術的な「論文」も引き続き投稿されることを期待したい。

いつものことながら、中西印刷には、図版や活字、写真の配置換えなど、いろいろと御迷惑をおかけしたことをお詫びしなければならない。また、本号は、原稿の依頼から校正まで、終始編集業務を担当した教育学部の高木助手に負うところが大きい。ここに記してその労をねぎらいたい。

なお末筆になったが、本号編集中、当研究センターの誕生以前からセンター関係の事務を担当していただいていた若村芳子さんが、都合により東京に移転され、9月10日付きでおやめになった。センターとしては誠にかけてがえのない人を失ったことになるが、やむを得ないことである。ここに長い間の御協力に対して深く感謝の意を表する次第である。

若村さんの後は、重松茉莉子、植村吉彦、田村幸江さんの3人に引きついでもらい、ますます多忙を極めるセンターの事務を処理していただいている。

編集委員も、自然科学部門から西占貢、吉井良三の二人が増員されていよいよ充実したので、本誌の一層の発展を図るべく努力して行きたい。おおかたの御協力を期待してペンをおくことにする。（編集委員）